

悪 霊 第八部・菊と李花の紋章

悪  
霊  
第八部・菊と李花の紋章<sup>エンブレム</sup>

【登場人物】

- 伊集院満枝……………北海道H市の地主の娘。川奈産業の大株主  
猪俣佐和子……………党での名前は井上  
安西小百合……………満枝とはI高等女学校の一年後輩。孤児院建設に奔走する  
佳代……………貧しい農家の娘。  
飯島貴代美……………元女工。モスクワ留学から帰国し党中央委員になる  
李麗姫……………元女性抗日パルチザン。満枝の協力者  
韓愛子……………元玉ノ井の娼婦。源氏名はまち子  
金沢文字……………貧民窟に暮らす少女  
小沼健吾……………元伊集院家の小作人。左翼運動から転向して国家主義者に。  
磯田アヤノ……………小百合の叔母。華道の師範  
磯田幸吉……………小百合の叔母の夫。高等小学校教師  
磯田悦子……………東京に家出して小百合に救われ、磯田夫妻の養女になる  
宮様……………陸軍大尉。参謀本部作戦課付。後、弘前歩兵第三十一連隊  
村野栄太郎……………左翼の学者。党中央委員長になる  
岩本……………大学出身の党中央委員。文芸評論家  
赤間……………大学出身の党中央委員  
畑野達男……………労働者出身の党中央委員  
清水……………労働者出身の党中央委員  
小泉俊吉……………農民出身の党中央委員

- 安藤浄海……………貧民街の僧  
安藤澄……………東京帝国大学国史科助教。安藤浄海の息子  
朴正烈……………朝鮮人青年  
洪谷少尉……………宮様付きの将校  
磯村中尉……………皇道派青年将校  
香野中尉……………皇道派青年将校  
林原少尉……………皇道派青年将校

【時・場所】

昭和八年（一九三三）一月～六月。弘前市、東京。

昭和八年も春をすぎ、やがて梅雨つゆを迎えようとしていた。

「しかしまあ……庇ひしほを貸して母屋むちやを取られるとは、このことだ」

市ヶ谷下の貧民窟の荒れ寺の仏間のそこかしこに、おびただしい数の書物が積まれ、二人の夫婦が庭に置いた大八車にせっせと積み込んでいた。彼らの作業を眺めながら、安藤浄海あんどうじやうかいはぶつぶつ呟いた。

「こうして荷物をまとめて出て行くこうとしているのに、誰も引き留めようとはしない。今まで仲良く暮らしてきた日々はなんだったのか。嗚呼ああ、苦渋の決断の果てに国連会議を退席した時の松岡全権も、同じ気持ちだったに違いない」

この五月末、関東軍と支那軍との間で協定が結ばれ、二年前の九月にはじまった満州事変は、一応の終結を見た。だが、その三ヶ月前の二月、国際連盟はほぼ満場一致で日本軍の満州撤退勸告を採決、欧米各国の予想を上回る非難に対し、日本側は連盟脱退で応えた。全権松岡まつおか洋右ようすけは「欧米各国は、日本を十字架にかけようと欲している」と演説をぶち、国連総会の場から立ち去ったのだった。

「なあに言ってるやがら」

仏間の隅っこに座り、曲げた膝を抱えて文子が言った。

「もともと、この寺に住んでたのは、あたいたちだ。あんたが勝手に転がり込んで来て、勝手に

出て行くって言うてるだけじゃないか。あんたに庇を貸してもらった覚えはないよ」

「まあ確かに、そうなんだが」

頭の汗をぬぐいながら、安藤は気弱に言った。

「得体のしれない男を連れ込んで、昼間からいちゃいちゃされたんじゃ、わしがいる場所がない。おまえらだって、わしがいないほうが、安心してお楽しみに耽ることができるはずだぜ」

「ばあか！」

文子は積まれた本を一冊取り上げ、いきなり投げつけた。本の角が安藤の股間に命中し、安藤は呻うめいてうずくまった。

「大丈夫ですか、旦那？」

人夫の一人が心配げに声をかけた。

「心配ない……大丈夫だ……」

安藤は左手で痛む股間を押さえ、顔を真っ赤にして、見るな、というふうに右手で人夫に手を振った。人夫たちは顔を見合わせ、苦笑しながら作業を続けた。

「なにも、最後のお別れに、こんなことをしなくても……」

目に涙を溜めて、安藤は抗議した。文子は肩をすくめて立ち上がり、鼻を鳴らして言った。

「嘘うそつくからさ」

「嘘うそなんか、いつ、ついた？」

「あたいが小沼さんと昼間からやつてるから出てくなんて、嘘うそに決まってる」

「何を言う、わしは……」

皆まで言わさず、文子は安藤の背後に回り、その尻を蹴った。尻を蹴られた振動が鞆丸に達し、安藤はまたも呻いて、床に腹這いに倒れた。

「あたい、知ってるんだよ。あんた、あたいが小沼さんとやってるのを、覗いて見てただろ？」

安藤は言い返さなかった。激痛のあまり、口をきくこともできなかったのだ。両手で股間を押さえ、ぎゅっと目をつむって痛みをこらえるしかなかった。

文子は容赦なく、うつぶせになった安藤の尻を踵で踏んだ。安藤は悲鳴をあげた。

「覗きながら、変なことしてやがったくせに……」

床を悶絶する安藤のかたわらに膝をつき、耳元に口を寄せて、文子は言った。

「例の本のこと……」

安藤の臉が開いた。文子は続けた。

「ばらしたら、おっさんのきんたま、二つとも潰しにいくからね」

安藤は目を見開いたまま、言わない、と呻くように言った。文子は続けた。

「たまを潰すのは、あたいの趣味じゃないけど、口外されて困るのは小沼さんだ」

あの人のためなら、あたいはやるよ。そう脅されて安藤は、俯せのまま必死に頭を動かし、頷いた。

文子は立ち上がって庭に出た。呆然と作業の手を止めて少女の乱暴狼藉を見つめていた人夫たちに、早く済ませて、あの親爺ごと運んでっておくれ、と言い残し、どこかへ出かけていった。

文子が向かった先は、川一つ向こうの朝鮮人部落だった。犬や鶏の毛が散らばる河原に建てら

れた掘っ立て小屋の傍らで、湯気のたつ鍋を載せた七輪を囲むように、二人の男が座っている。

小沼健吾と、朝鮮人の朴正烈だった。

「やあ」

右手をあげて近寄ってきた金沢文子を、二人の男は見上げ、笑みを浮かべた。文子は鍋の蓋をあけて、今日はなあに？ と訊ねた。朴が「鶏肉」と答えると、文子は、豪勢だね、と笑った。

「安藤のおっさん、行っちゃったよ」

文子が小沼に言い、大丈夫、絶対に喋らないよう脅しといたから、と付け加え、右目をつぶってみせた。小沼は、きんたまか？ と呟くように問うた。文子は頷いた。小沼は苦笑した。

「あれは、こたえる」

「小沼さん、身をもって経験したもんね」

文子は、小沼にびったりと身を寄せ、手を伸ばしてその股間を撫でた。

「あたいが、治してあげたんだから、感謝してよ」

小沼は、文子を抱きしめて接吻し、河原に押し倒した。やめてよ、見られてるじゃないか。そう笑いながら、抵抗するそぶりは見せず、豊かな乳房に顔を埋める小沼の頭を抱いた。朴正烈は、鉄箸で鍋をかき混ぜながら、笑って二人の痴態を眺めている。

前年の九月から十月にかけて、小沼は十数日にわたって監禁され、猪俣佐和子と海老沼千恵子による責め苦を味わった。一日に一度は鞆丸を痛めつけられたのだ。ギャング事件が起こる直前、踏み込んできた警察によって救出され、病院で治療を受けた。だが傷が癒えてた後も、どんな刺激を与えても小沼の陽物はびくりとも動かなかった。そのときに味わった絶望は忘れられない。

小沼は自殺を考えたが、死ぬ気力さえ湧いてこなかった。退院し、街を彷徨ううちにたどり着いたのが、文子の荒れ寺だった。

数日、小沼は子供のように文子にすがりついて過ごした。文子は何も訊かず、優しく抱きしめてくれた。ある朝、下腹部に快楽を覚え、小沼は目覚めた。まだ開けやらぬ薄暗がりのなかで、文子の唇は、小沼の陽物をくわえていた。温かな文子の口中で舌が巧みにうごめき、これまで味わったことのない快感が、体内を駆け回った。小沼は、文子の口の中で果てた。

それからというもの、小沼はひたすら文子の肉体を求めた。一日に一度は、体を交えた。朴正烈と三人で楽しむこともしばしばだった。若い文子は、獣のように猛り狂う小沼を、しっかりと受け止めた。性欲の回復は、気力の回復をもたらした。

年が開けた頃から、小沼は、勉強会を始めた。月に二度、仏間に集まって、例の「湖南省農民運動視察報告」を読み、意見を交換する。最初は、小沼と文子、そして朴の三人だけだったが、次第に参加者が増え、今では十数人を数えるようになった。

勉強会のことは、安藤には秘密にしていた。だが昨日、安藤は、文子が仏間に置き忘れた「湖南省農民運動視察報告」を見つけた。一読して、その過激な内容に安藤は震え上がった。そんな文書をなぜ文子を持っているのか、思索した安藤は、小沼が渡したに違いないと判断した。

——あの男、思ったより危険な奴ではないのか？

国家主義団体の一員でありながら、支那の革命家が書いた危険な文書を持っている得体の知れない男。反体制を標榜しつつ、危険な綱渡りは極力避けてきた安藤は、ここは逃げるが勝ち、と踏んだ。

そして文子は敏感に、安藤が「湖南省農民運動視察報告」を見てしまったことに気づいた。ペー지를開けっぱなしにして放置していた冊子が、閉じられていたからだ。結局、安藤は口実をつくって寺を去ることになり、文子は口止めのため、安藤の鞆丸を踏みつけて脅したのだ。

「いっけね！」

不意に何かを思い出したように、小沼にのしかかれていた文子が叫んだ。

「そろそろ、お客さんが来る時分だよ。忘れてた」

ちよいとお預け、と言いつつ、小沼の下から這いだした文子は、はだけられたシャツのボタンを留め、スカートの裾の皺をのばした。

「お客さん？」

朴に問われ、文子は答えた。

「うん。上野の朝鮮部落で知り合ったんだ」

勉強会を始めてから、文子はしきりと、他の地域の貧民窟や朝鮮部落に赴くようになった。信頼できる人物を勉強会に誘い、同志を増やしていこうというのである。

「お寺のほうに来ることになってるから、待つてなきゃならないの。ごめんね」

安藤のやつ、もう出てった頃だよな……。そう呟きながら、文子は歩き出した。

寺に戻ると、仏間から安藤浄海の呻き声が響いてきた。

「まだ、いたの？」

戻ってきた文子は呆れた顔で仏間にあがった。安藤は俯せに伏せ、両手で股間を押さえたまま、

ぎゅっと目をつむり、齒を食いしばっている。

最前まで積まれていた書物はきれいに片づけられ、人夫たちもいなくなっていた。そのかわり、薄汚れた着物に手ぬぐいをほっかぶりにし、まるで行商のような姿の伊集院満枝が、安藤の傍らに座っている。

来るたびに、芸者のなりをしたり、行商に扮したり、よほど変装の好きなお嬢さんだ。呆れる文子に「お久しぶり」と微笑み、満枝は安藤に眼をやって問うた。

「あなたが、やったの？」

「うん」

こいつも運んでいけって言ったのに、あいっらしうがねえな、と呟いて文子は、人夫たちが作業していたあたりに目をやった。

「違うわ。わたくしが頼んだの。この人を置いていくように」

「どうして？」

満枝は唇の端を僅かにあげ、眼を細めていたずらっぽく笑った。笑顔が意味するところを覺つて、文子は肩をすくめた。

「こいつをおもちゃにするのは構わないけどさ。それにしても、なんであんだ、なんの関係もない男を去勢したがるのかねえ」

満枝は笑顔で答えた。

「こんなおもちゃにしがいいのある男は、放っておけないのよ」

「おもちゃにしがいいがある男って？」

首を傾げる文子に、満枝は言った。

「あなたは、かわいい、そうだと思うた男とは寝てあげることにしていると、そう、おっしゃっていたわね」

「言ったけど、それが？」

「わたくしは、えら、そんな男性を見ると、去勢したくなるの」

文子はしばし安藤を見つめた。えら、そんな男。反体制を標榜しつつ、政府に逆らうことは実のところ何もしておらず、そのくせ貧しい者の庇護者然として振る舞って飯のタネにしていた安藤は、確かに、えら、そんな男かもしれない。

文子は問うた。

「どうしてもやるのかい？」

「だめかしら？」

「やな奴だけ……」

訝しげに問い返す満枝に、文子は膝を抱えて座り、口を尖らせた。

「悪人ではないからねえ」

「悪い奴じゃなくて、やな奴を全部やつつけるのが、革命よ」

満枝はざらりと言った。

「寝る男を選ぶように、倒す相手を選んで倒せばいいの。善悪や正邪は関係ないわ」

そんなもんか……。美しい面立ちで、平然と酷いことを言っている満枝の言い分を聞いてみると、なんとなく納得させられてしまう。

「ま、いいけどさ」

文子は言った。

「こっちにとばつちりが来ないよう、頼むよ」

「ま……待て！」

今まで身じろぎすることもできず苦悶していた安藤が、不意に身を起こした。

「お、おまえたち……さつきから何の話をしてるんだ……？ 去勢するだど？」

「この人、そうしたいんだってさ」

文子が顎でさした先で、こにこ顔の満枝を凝視し、安藤は問うた。

「誰だ、この女は？」

「男のきんたまを潰すのが大好きなひとだよ」

否定せず微笑む満枝に、安藤は狼狽し、必死に立ち上がった。背中を丸め、左手で股間を押しさえ、今にも嘔吐しそうな顔で、よろよろと仏間を出ていこうとする。

「おっさん、大丈夫？」

そう声をかけられ、こんな所一秒でもいられるか、と言い捨て、安藤は去っていった。

「あれ、行っちゃったよ？」

座ったまま安藤を見送る満枝に、文子は問うた。追わないの？

満枝は答えた。

「別に、今じゃなくてもいいわ」

「後でやるのかよ」

文子は呆れて笑い出した。

「ほんとにあんた、好きだねえ。いったい、これまで幾つ潰したの？」

「数えたこともないわ。あなたはどのなの？」

「うーん……蹴った奴は何人もいるけど、潰れたかどうかなんて、確かめたことないから、わからないや」

「それじゃあ……」

満枝は、文子に顔を寄せて言った。

「わたくしと一緒に、やってみる？」

「やめとく」

文子は素っ気なく首を振り、満枝の顔を押し戻して立ち上がった。ふと庭に目をやって「あ！」と叫んで破顔した。

「よく来たね」

そう言いながら、裸足で庭に出た。庭には、粗末な和服姿の若い女が立っていた。髪の毛を無造作に後ろに束ね、瓜実顔だが、眼が細く、唇は薄い。整っているが鬢りのある面差し。文子は彼女の腕をつかんで言った。

「あがりなよ、まち子さん」

家出した弘前の少女・悦子の行方を捜して安西小百合が東京に出てきたのは、二年前の昭和六年の秋。浅草で彷徨っていた悦子は、言葉巧みに近づいてきた与太者の五郎に籠絡され、監禁さ

れた。家出娘を食い物にする悪党の五郎が、ただ一人、心を開いて接していたのが、玉ノ井の私娼・まち子だった。

まち子は、明治四十三（一九一〇）年、日本に併合されたばかりの朝鮮半島で生まれた。本名は韓愛子。失政を繰り返す朝鮮王朝に失望していた両班の父親は、日清・日露の戦役を通じて朝鮮半島支配を強めていく日本に、協力的な態度をとった。娘に「愛子」という日本風の名前をつけた父親だったが、日韓併合で進出してきた日本の資本家に騙され、土地を奪われた。没落した父親は、日本に活路を求め、玄界灘を渡った。

大正十二年、まち子が十三歳のとき、関東大震災が起こった。朝鮮人が井戸に毒を投げ込み、放火してまわっている。流言飛語を信じた日本人たちが結成した自警団によって、まち子の両親は殺害された。

身寄りをなくしたまち子は、娼婦として満州をはじめ各地を転々とした。玉ノ井の私娼窟に流れ着いた頃、いづれ身請けしてやると言い続けていたのが、五郎だった。その五郎が殺されたことを新聞で読んだまち子は、玉ノ井を足抜けした。足抜けしても行くあてなどない。上野の朝鮮人部落にまぎれこみ、身を売って口に糊してきた彼女は、文子から聞いた支那の革命運動に、目を輝かせた。もっとその話を聞きたい。そうせがむまち子を、文子は勉強会に誘ったのだった。

ちようど日が落ちかかった時間であった。仏間にあがり、文子がまち子のことを満枝に説明している間に、小沼健吾と朴正烈が、さきほど河原で煮ていた鍋を提げてやってきた。

仏間に置いた鍋を囲んで、鶏肉をつつきながら談笑するうち、一人、また一人と集まってきた。勉強会の開始時間は特に決めていない。ある程度そろったところで始めるのだ。やがて十五人になり、鍋が空になった時、小沼が「はじめようか」と言った。

——湖南省における農民運動は、去年一月から六月までの極秘活動の時期を経て、七月から九月にかけて公然たるものとなり、それまでその地を支配していた軍閥の領袖を追放した。……十月から本年一月までが、革命の時期である。農民協会の会員は二百万人に達し、農民協会が動員できる大衆は一千万人となった。……農民は、農民協会の指導の下、ついに決起した。四ヶ月にわたり、前代未聞の農村大革命が勃発したのである。

——組織化された農民が最初にやったことは、土豪劣紳の威光を地に落とせしめることであった。……土豪劣紳のうち、殊更富裕な者は、銃殺に処された。……農民協会の命令に背いた土豪劣紳の家に、農民たちは大挙して押し寄せた。家を踏み荒らし、夫人や令嬢の寝台に土足であがって寝転んだ。四日間にあつて食事を出させ、百数十頭の豚を潰させた。

——各地で盛んに行われているのは、三角の帽子を冠らせ、村じゅうを引き回すことである。その帽子には、土豪何某、劣紳何某と記されている。前後を大勢の人に取り巻かれ、彼は縄で縛られて歩かされる。農民たちは銅鑼を鳴らし、幟を立て、大勢の見物呼びを集め、「思い知ったか！」と罵詈雑言を浴びせながら、縄で縛られた土豪や劣紳にあらゆる制裁を加える。……一度でも、このような制裁を受けた者は、廃人同然となり、二度と立ち上がれなくなるまでうちのめされる。……農民協会は、この制裁を巧妙に使っている。彼らは捕らえた土豪に、この制裁を受けさせると宣告する。そうしておいて、実際にはやらない。土豪は、いつ、あの制裁を受けることになるか分からず、日夜苦悶と不安の日々を過ごすのだ。



——何もかもが常軌を逸していた。村は恐怖に包まれた……。

やがて夜も更け、天井から吊された裸電球の薄暗い灯りの下で、淡々と読み進む小沼の顔を、まち子が瞬きもせずに凝視しているのに、満枝は気づいた。気づいて、薄い笑いがその面差しに浮かんだ。

「革命とは、客を饗応することでも、文章を書くことでも、絵を描くことでも、刺繍ししゅうをすることでもない。左様な、上品で、優雅で、穏健で、慎ましいものではない。革命は暴動である。一つの階級が、他の階級を打倒する激烈な行動なのだ」

そこまで読んで、小沼は冊子を閉じ、質問か意見はありますか？ と問うた。

「はい」

手を挙げたのは、三度目の参会になる、鑄掛いかけ屋を営む青年だった。

「本当に支那で、そんなことがあったんですか？」

「ありました。今でも同様の革命は続いていて、支那大陸各地に広がっています」

「では、その……湖南省だけじゃなく、他の土地でもそんなことが起こってるんですね」

「そうです」

小沼は断言した。部屋の隅で聞いていた満枝は、俯うつむいてかすかに笑った。毛沢東が湖南省で始めた「農村土地革命」は、支那共産党中央部の批判を浴びて中止に追い込まれ、毛自身も実権を失い失脚状態だったのだ。日本には伝わっていなかったが、満枝は大陸につくった情報網から、そのことを知っていた。知っていて、誰にも言わなかった。

「はい」

続いて手をあげたのは、朝鮮人部落に住む日雇いの労務者だった。

「その……日本でも朝鮮でも、農民の暴動は起こっています。なぜ支那では成功し、朝鮮や日本ではうまくいかなかったのでしょうか」

「そうですね」

小沼は腕組みし、やや考えてから言った。

「農民暴動だけではありません。昨年五月の犬養総理暗殺の時も、軍人と民間人が一体となって国家改造を目指す計画だったのが、結局、一部軍人が犬養一人を暗殺して終わり、体制はびくりとも揺らがなかった。私はそのことについて、ある人物にこう言われたことがあります」

そこで言葉を切り、参会者を見回してから、口を開いた。

「軍人たちの国家改造運動は、反乱を起こした者自らが政府を倒し、新たな革命政府を作ろうとはしていない。自分たちが動けば、軍首脳は立ち上がり、陛下にもご賛同いただけるはずだと、いわば他力本願。誰一人、ロシアのレーニンたらんとする者が出てこない。それはなぜか……」

「その後は、わたくしが申し上げますわ」

伊集院満枝が口を開いた。参会者の視線が一斉に彼女に注がれた。満枝は立ち上がり、小沼の傍らに座った。

「ロシアや支那で革命が成功したのは、皇帝がすでにいなかったからです」

参会者が一斉に息を呑んだ。満枝は続けた。

「ロシアでレーニンの一党が蜂起して社会主義政権を樹立したのは、ニコライ二世がケレンスキの臨時政府によって退位させられ、ロマノフ王朝の命脈が絶ちきられた後でした。支那でも、

共産党が大きな勢力を得ることができたのは、袁世凱えんせいがいによって清朝が断絶させられていたことが大きかったのです。数百年、数千年にわたって民心の礎いしづえとなってきた皇帝が滅びた後、民は誰を仰いで行動すればよいか分からず迷っていた。そこでもっとも果断に、無慈悲に動いた者が、革命を成し遂げたのです。すなわち……」

口調が次第に熱を帯び、参会者は瞬きもせず満枝を凝視した。

「ロシアでは数十万の富農クラークをはじめ特権階級が処刑され、あるいは強制収容所に送り込まれました。支那で起こっていることは、今、小沼さんがお読みになったとおり。それが可能になったのは、民が仰ぎ見る皇帝がもはや存在しなかったからなのです」

「では……」

手を挙げたのは、まち子だった。満枝の眼がぱつと輝いた。まち子は立ち上がり、眼を伏せたまま、低い声で言った。

「天皇がいなくなれば……日本も、そこに書いてあるような世の中になるんですか？」

参会者たちの面差しはますます強おぼばった。暗い眼差しで見つめてきたまち子に対して、満枝は静かに答えた。

「むしろ、そうならないかぎり、ここに書かれているような世の中にすることはできません」

それから、参会者の一人に目をやり、立っていただけませんか？ と声をかけた。声をかけられた青年を手招きして呼び寄せ、向かい合って立ちながら、満枝は言った。

「われわれは、無力です。一方、国家は軍隊も警察も持っている。強大な敵にまともに立ち向かつては勝ち目はありません。わたくしたち女性が、男性とまともに戦うことができないように。」

でも……」

満枝は口を閉ざし、青年を覗のぞき込むように見つめた。青年は赤面し、思わず目をそらした。すかさず満枝は素早く動き、ぴつたりと青年に身を寄せた。

「あ……！！」

青年が呻うめいた。満枝の手が、青年の股間を掴つかんでいた。満枝は、再びまち子を見やって言った。「相手の懐ふところに飛び込んで、ひねり潰つぶすことは、弱い女にもできませんわ」

ひねり潰すという言葉に青年の面差しが恐怖に青ざめ、参会者たちはざわめいた。満枝は手を離した。青年は、腰を抜かして座り込んだ。

震ふるえが止まらず、歯をかちかち言わせて動けない青年を見やり、まち子は口を開いた。

「いつ、それをやるのですか？」

「さあ……」

満枝は微笑んだ。

「一年後か二年後か……いずれにしても皆さん、その時が来るまでは自重なさってくださいね」

その夜更け。

「なあ……」

勉強会の参会者が帰った後、がらんとした仏間にあぐらをかいて座り込み、仏像を見上げながら文字が言った。

「小沼さんはどう思う？」

「何についてだ？」

朴正烈と向かい合って座り、朝鮮どぶろくを呑んでいた小沼が問うた。

「伊集院満枝が言ったことさ」

「うむ」

「本気で天皇の懐に飛び込んで、きんたまをひねり潰すつもりなのか、あの女」

「多分な」

小沼はどぶろくをあおり、掌で唇をぬぐって言った。

二十歳をすぎたばかりの若さにもかかわらず、北海道の大地主として、川奈産業の大株主として、満州や支那、朝鮮を股にかけて活動する伊集院満枝ならば、やってのけるかも……。そう思ったが口には出さなかった。

「たいした女だね」

文子は、小沼に身を寄せ、笑みを浮かべて耳元で囁いた。

「惚れてるんだろ、ほんとうは？」

小沼は答えず、文子を床に押し倒した。

同じ頃。

幌で座席を覆った一台の自動車が、麻布の高級住宅街の一角にある洋館の前に止まった。ドアが開き、なかから二人の女が、一人の男を抱えるようにして出てきて、洋館のなかに引きずり込んだ。ドアが閉められ、あたりを再び静寂が包んだ。

「や、やめろ！」

洋館の一室に悲鳴が轟いていた。天井から日本のロープが吊り下げられ、その先端が、両手をあげて万歳する姿勢をとらされた安藤浄海の左右の手首を縛っていた。

彼の目の前に二人の女が立っていた。伊集院満枝とまち子である。

「いったい、なんのつもりだ。わしが誰だか知っていて、こんなことを……」

「もちろん、よく存じておりますわ」

満枝が微笑んで言った。

「貧者のために戦う自由の闘士を装いつつ、元検事時代の人脈を生かし、影で司法と取り引きし、裏金を貯め込んでいる売名家なんですってね」

「黙れ、女！」

安藤は居丈高に怒鳴った。

「貴様の言うとおり、わしは元検事だ。裁判所の判事にも、警視庁の幹部にも、知り合いが多いんだ。こんなことをしてただですむと思うな。牢屋にぶち込まれなくては、さっさと縄をほどくんだ！」

わめきつづける安藤は、不意に悲鳴をあげた。満枝が、安藤の股間を掴んでねじりあげたのだ。

「申し訳ありませんけど」

満枝は冷たく言った。

「今、わたくしが申し上げたあなたの評判は、大審院院長さんから、直接うかがったことです

わ

「なに……牧野さんが？」

「あら、今の院長さんは和仁さまですわよ。牧野さまはとうの昔に退官なさいました」

司法の最高責任者の名前を出されて、安藤は口を噤んだ。満枝は続けた。

「お二方とも、ある場所でお知り合いになって、懇意にしています」

「貴様、いったい誰だ？」

安藤は面差しを青くして問うた。

「なぜ、あんな荒れ寺に……」

「文字さんや、朝鮮部落の方々とも懇意にしておりますから」

満枝は、暗い面差しで安藤を見つめるまち子に眼をやって言った。

「この方も、朝鮮で生まれた方ですよ」

「朝鮮で？」

「ええ、関東大震災のとき、自警団にご両親の命を奪われた、かわいそうな方ですの」

それを聞いて、安藤の面差しに血の気が戻った。

「なあ、あんた」

安藤は救いを求めるように、まち子に顔を向けて言った。

「わしは、関東大震災の時の朝鮮人虐殺について、おおいに政府を批判する本を書いた。家族を失った朝鮮人たちに施しました。わしは、あんたたちの味方なんだ。頼むから、わしを解放するよう、この人に言ってやってくれ」

「そうね」

満枝は、口を噤んだままのまち子に向かって言った。

「あなたが決めればいいわ。この人を解放するか、それとも……」

唇の端を歪めて冷たい笑みを浮かべ、満枝は言った。

「わたくしたちで、おもちゃにするか」

満枝の笑みに、再び色を失った安藤が何か叫ぼうとした時、まち子の手が、彼の股間に伸びた。ズボンの上から二つの睾丸を掴み、強く握りしめた。

安藤は絶叫した。

「これで、いいのかしら」

満枝を見やって、まち子は問うた。暗く翳っていたまち子の面差しに、青白い光が差していた。満枝は頷いた。まち子は、ぜいぜいと息荒く苦痛に耐える安藤を見つめて言った。

「この人は、私たちの味方なんかじゃないわ」

何か言おうとして、再び安藤は絶叫した。まち子は、掴んだ股間に指を強く食い込ませていた。

「むしろ、私たちのことを見下している」

「そう、お思いになる？」

「ええ」

まち子は続けた。

「私を買った男たちは、私が朝鮮人だと知ると、この男と同じような顔で、同情するようなことを言ったわ。そのくせ、私を見下したように扱った。そうじゃなかったのは……」

いったん言葉を切り、俯いてまち子は呟いた。五郎だけだった……。

「五郎はね」

再び顔をあげ、苦悶する安藤を喜色に溢れた見つめつつ、まち子は言った。

「何者かにきんたまを潰されて、死んだの」

「まあ、そうなの！」

「五郎の死に目に、私は会えなかった。死んだ顔を見ることもできなかった。だから私は……」  
さらに腕に力をこめて、まち子は言った。

「きんたまを潰されて、男がどんな顔をするか、どんなふう死んでいくのか、見たい！」

「わたくしも、一緒よ！」

満枝は叫び、ひとつ私にちょうだい、とまち子にせがんだ。まち子と満枝は左右に並び、それぞれ安藤の睾丸を一個ずつ掴んで圧迫した。安藤は白眼を剥き、もはや叫ぶ気力もなく、天井を見上げるように顎をあげ、激しく総身を震わせるばかりだった。

「地主だったわたくしの父親は、小作人の娘に去勢されて亡くなった」

感極まった面差しで、満枝は言った。

「だからわたくしは、女に去勢される時の男が見たくて、こんなことを続けてきたのよ」

「あなたは、すごいわ」

まち子の頬が紅潮し、肩が荒く上下していた。

「女の力で、男をこんなに苦しめられるなんて……あなたはいつたい、何人の男のきんたまを潰してきたの？」

「数えきれないほどよ！」

「私にもできるかしら？」

「できるわ！」

満枝は、睾丸を掴んでいないほうの手を、まち子の首に回し、頭を抱き寄せ、その唇を吸った。同時に、二人の女の掌のなかで、安藤の睾丸が二つとも破裂した。

二時間後。

「もう、終わったの？」

ドアを開けて入ってきた女——元抗日バルチザンの李麗姫は、全裸で床に俯伏せになった安藤浄海を見下ろしながら言った。満枝と出会って二年、麗姫の口調からは朝鮮なまりが消え、なめらかな日本語になっている。

「ごめんなさいね、麗姫。あなたのおんを残してあげられなかったわ」

白いシルクのガウンをまとった満枝が麗姫に歩み寄り、頬に接吻して言った。ベッドの上では、まち子が身繕いしている。頬を赤くし、当然とした面差しのまち子を一瞥して麗姫が問うた。

「あの娘が、そうなの？」

満枝は頷いて言った。

「そうよ、まち子さん……いえ、あなたと同じ朝鮮で生まれた韓愛子さんは、今日始めて男性を去勢なさったの」

ベッド上で恥ずかしそうに顔をそむけるまち子を見つめながら、麗姫は続けて問うた。

「やれぞう？」

「ええ。きつと頼もしい仲間になれるわ。鍛えてあげてちょうだい」

麗姫は、満枝から身を離し、安藤の身を仰向けにした。苦しげな面差しのまま息絶えた安藤の口に、男性の生殖器が突き刺さっていた。安藤の股間は血にまみれ、そこには何もなかった。